

◆二十四番（松井英雄君） 二十四番、公明党長野市議員団松井英雄です。

認知症施策について伺います。

先月、認知症で無事保護されたにもかかわらず、身元が分からなかったため、介護施設で生活をしていた女性がテレビ番組をきっかけに七年ぶりに家族と対面したニュースがありました。長野市においても、三月定例会にて、本年夏頃より行方不明者情報メール配信を導入するとのことでした。御家族が行方不明になったときに、まず警察に連絡することが多数であると思いますが、命に関わるだけに同報無線、配信メールシステムを持つ消防局と警察の連携は非常に大切だと思いますが、消防局と警察、それぞれの認知症によると思われる行方不明者捜索届数とどんな連携をとって行方不明者情報メール配信を行っていくのか、お聞かせください。

また、塩尻署では認知症はいかいカルテを作り、管内の地域包括支援センターに配ったとの報道がありました。このカルテは、事前に御家族が高齢者の特徴を書き込んでおき登録するもので、行方不明届の度に特徴などを聞くことがないため、探し始めるのに時間が掛からないといったものです。御家族も警察に特徴を話し、消防でも同じ特徴を話すのでは二度手間です。

そこで、本市でも地域包括支援センターでこのカルテを導入することによって、警察、消防、センター、御家族の連携を更に深めるツールとなるとと思いますが、いかがでしょうか。

今後、高齢者が急増する中で、認知症、認知症予備群も増えるものと予想され、地域で支えることは非常に重要であり、この支え手をいかに作っていくかということで、認知症サポートキャラバンの推進、認知症サポーターなど取り組んでいただいておりますが、市民への認知症の啓発は非常に重要であり、課題であると思います。

名古屋市瑞穂区では、認知症ひとり歩きさぼーとBOOKを作り、認知症とは、認知症の方への声の掛け方、家族の役割、また長野市でいう行方不明者情報メール配信について相談機関などが書かれており、地域包括支援センターやホームページから取得できるようになっています。

長野市においても、このような冊子を作り、新たなサポーターづくりやサポーターが受講だけではなく、地域で支える主体者となるよう啓発を進めていくべきと考えますが、いかがでしょうか。また、スーパー、タクシー、バスなど事業所の協力も必要と考えますが、事業所への啓発、連携、認知症サポーター講座はどのように行っているのでしょうか、お聞かせください。

（二十四番 松井英雄君 質問席へ移動）

◎保健福祉部長（寺澤正人君） 認知症施策について、四点お答えいたします。

初めに、行方不明者情報メール配信の消防局、警察との連携についてお答えいたします。

このメール配信システムは、消防局が防災無線と併せて、地区の消防団員等へ行方不明者情報を配信するシステムで、この六月から消防局運用のシステムを活用し、キャラバン・メイト等とのネットワークを構築したものであります。

認知症高齢者に限らず、行方不明者全般について運用するシステムであり、認知症高齢者に限った取扱件数の把握はしておりません。六月六日現在、御登録いただいたキャラバン・メイトは約七十名となっ

ております。キャラバン・メイトは、専門研修を修了した方で、認知症サポーター講座の講師を担っていただくなど、地域での認知症の理解と認知症高齢者の支援、推進に取り組んでいただいております。

メール配信に当たっては、外出の際に周囲に気を掛け、はいかひの疑いのある方に声を掛けていただくなど、少しでも早く認知症行方不明者の発見につなげるための御協力をお願いしております。

認知症が原因で県警に捜索願の届出があった件数について、長野中央警察署管内では平成二十五年度二十二件、長野南警察署管内では十一件とお聞きしております。また、行方不明者情報のメール配信は、長野市独自のシステムであり、県警の捜索願と連携したものではありません。現状では、同報無線やメール配信システムは、行方不明となった方の御家族など関係者の御判断で御利用していただくものとして運用しております。

次に、認知症はいかひカルテについてお答えいたします。

塩尻署で導入されているシルバー安全安心カルテは、はいかひ者の早期発見に向けて大変有効な方法と考えております。先月開催した地域包括支援センターの会議でも、安全安心カルテ運用の勉強会を行ったところでもあります。塩尻署で安全安心カルテが導入された当時の副署長の御講演や県警職員を交えたカルテ運用に関する意見交換も行き、はいかひ高齢者の支援のため、地域包括支援センターと警察機関との連携の重要性について認識を深めたところがございます。今後、地域包括支援センターや警察機関等、関係者を交えて検討を重ね、導入した場合の課題を整理しながら、長野市版安全安心カルテの導入に向けて調整を行ってまいります。

次に、認知症の啓発のためのサポートブックを作成したらどうか、という御質問についてお答えいたします。

市では、認知症の人を温かく見守り、地域で支援を推進するために、認知症サポーター講座を開催しております。講座の開催に当たっては、全国キャラバン・メイト連絡協議会が発行する、認知症を学び地域で支えようという冊子を教材として利用しております。この冊子や寸劇などで、認知症の早期治療の大切さや認知症の人への介護、支援などについて理解を深めていただき、昨年度は二千二人、累計で一万四千九十一人の方々に受講していただいております。今後もサポーターを含めたより多くの方々に、認知症の方を地域で支えていくという視点で、認知症に関する知識を深めていただきたいと思います。

御紹介いただきました名古屋市のひとり歩きさぼーとBOOKは、声の掛け方など、大変アイデアにあふれた冊子だと思います。十分参考にしながら、市民に向けた啓発に更に取り組んでまいります。

次に、事業所の協力についてお答えいたします。

平成二十五年度中に市内の事業所における認知症サポーター講座の実施状況は、銀行などの金融関係事業所が五件で、参加者は八十七人、大型商業施設、建設会社、警備会社などの事業所が九件で百八十七人に御参加いただき、実施いたしました。

また、平成二十五年度からは、長野商工会議所の御協力を得て、企業、商店街、組合などの皆様のお客様への対応スキル向上に役立てていただけるよう、サポーター講座の案内チラシを作成し、加盟事業所に配布していただくなど、周知を図っております。

今年度は、認知症サポーター講座を受講した事業所には、営業車両などに貼れるステッカーの配布を予定しております。引き続き、事業所の皆様の御理解と御協力をいただきながら、サポーターを養成し、認知症への理解者が増えるよう努めてまいります。

◆二十四番（松井英雄君） 行方不明者情報メールを受ける方は、キャラバン・メイトの方が多いと思いますので、是非ともこの行方不明者の方は認知症である、あるいは違うというものも分かるようであれば、探す方も情報として分かりやすいと思いますので、そちらの方の工夫も是非お願いしたいと思いますし、また、はいかいカルテの方もしっかり研究していただいて、一日も早く導入していただければと思います。

再質問になりますが、サポーター講座を受け、その後、サポーターの方が地域において認知症の人やその家族を見守り、支える人となるわけですが、どれだけ認知症サポーターとしての意識を持ち続け、市民、事業所などが取り組むかが大切です。市民の皆様にはメール配信の登録などをお願いし、メール配信を含め、先ほどのカルテを事業所等に配信するシステムの構築も必要だと思いますが、お聞かせください。また、地域においてのサポーターの組織化も必要と考えますが、市としてのお考えをお聞かせください。

また、認知症サポーター講座を受けた事業所も多くあるとお聞きしました。この事業所を認知症の見守り協力店・事業所として、先ほどのサポートブックの中に見守り支え合いマップのようなものを作成するとともに、この協力店舗が不明者発見や異変に気付いたときの消防、警察、地域包括支援センターなどへの連絡体制も必要と思いますが、いかがでしょうか。

◎保健福祉部長（寺澤正人君） 再質問いただいた三点についてお答えいたします。

初めに、安全安心カルテを事業所等に配信するシステム構築についてお答えいたします。

行方不明者情報のメール配信は、先ほど申し上げましたシステムを活用し、市に御登録いただいたキャラバン・メイトと市保健福祉部の職員への配信を行うものでございます。行方不明者の早期発見には、より多くの方々に御協力いただくことが効果的だと思います。しかし、認知症に対する正しい知識や理解が必要であることから、事業所や地域の方々には、現在行っている認知症サポーター講座にお申し込みいただき、認知症や認知症の方との接し方などの理解を深めていただきたいと考えております。

今後は、介護事業関係者等への登録協力依頼を検討するとともに、登録に当たっては、講座受講済みの方々を対象とすることが望ましいことから、メール配信の運用方法などを検討した上で協力を呼び掛けてまいりたいと考えております。

なお、カルテとメール配信の運用主体が違う点や個人情報取扱の点から、認知症はいかい者搜索のためのカルテを配信するシステムの構築については、慎重に検討し、判断してまいります。

次に、認知症サポーターの組織化についてお答えいたします。

認知症サポーター講座を受講していただいた方々には、認知症への理解を持ち続けていただき、それぞれが可能な範囲で認知症の方を地域で支えていただきたいと考えております。地域での組織化の検討に当たっては、サポーターや地区役員等、関係する方々の御意見を伺うことが大切であると考えております。先進地事例などを参考にしながら、推進役であるキャラバン・メイトとともに、必要性や在り方について意見交換をしてまいりたいと考えております。

認知症サポーター講座について、市広報やホームページで広く周知するとともに、多くの方々に正しい知識を得ていただき、認知症の方とその家族の継続的な支援に御協力いただきたいと考えております。

次に、見守り支え合いマップ作成についてお答えいたします。

御家族に認知症が疑われる人がいた場合に、どこに相談に行き、その後、どのような医療・介護サービ

スを受けて、どのように地域で生活していくことができるのかを分かりやすく示す認知症ケアパスの作成を始めております。

この中で、地域での生活支援に関する情報を分かりやすく提供したいと考えており、安心して出掛けられる場所や介護サービスを利用できる施設といった支援に関する地域資源の調査を行っております。認知症の方や御家族の支援に御協力いただける地域の企業や事業所、ボランティア等の情報が得られた場合には、ケアパスの作成に取り入れることも考えてまいります。

多くの事業所から御協力いただくことができるようであれば、見守り支え合いマップとして、地域包括支援センターごとのケアパス作成・普及を行う中で取り入れられるものか検討したいと考えております。

◆二十四番（松井英雄君） この認知症のカルテができた場合に、事業所に配信するシステムですが、もちろん個人情報というものはあるかと思えますけれども、命に関わる問題でございます。電車にひかれてしまったですとか、残念ながらお亡くなりになってしまったというニュースも多くお聞きします。是非とも家族の同意をもちろん得た上で、写真等もそのカルテにあるようでしたら、それが配信できれば見て分かるのではないかなと思えますので、是非とも御検討いただければと思います。

また、協力事業所も多く御協力いただければ、是非というお話ですが、多くの御協力をいただけるように努力していただきたい、このように思っております。よろしく願いいたします。

次に、AC長野パルセイロ支援について伺います。

五月四日に行われた長野運動公園陸上競技場でのパルセイロの試合では、観客数も八千人を超え、私も観戦に行きましたが、会場で入場者数八千十一名のアナウンスが流れたとき、競技場全体でうおーと歓声が上がりました。試合にも勝利し、その後も快進撃でいよいよJ2も見えてきました。

八千人を超える大感動のまま、篠ノ井の応援団と共に打ち上げを行いました。そんな中で、南長野運動公園総合球技場改修の寄附金について、オレンジの羽募金という御意見を頂きました。南長野運動公園総合球技場改修の寄附金もふるさと納税や企業への働き掛けなど、御努力をいただいていることもお聞きしております。

ふるさと納税では、個人の一万円寄附でピンバッジ、累計で五万円以上の寄附でスタジアムへの名板設置となっていますが、一万円は厳しいがもう少し低い寄附額設定があればといったことから、オレンジの羽募金とのお話を頂きました。赤い羽根、緑の羽根募金は地域でも回覧で回り、強制ではなく希望者に寄附をしてもらい、そして羽をもらう、その募金の季節には、胸に羽を付けた方が多く見られます。

そこで、長野市において、パルセイロ支援の一環としてオレンジ羽募金を導入し、まち中がオレンジの羽を付けた人でいっぱいになり、「何だいその羽は」、「知らないのかい、パルセイロの寄附でもらったんだよ」なんて会話があちこちで生まれ、寄附もパルセイロの応援機運も盛り上がるのではないのでしょうか。また、オレンジの羽でなくても、例えば寄附金限定ステッカー千円などを考えられないでしょうか、お考えをお聞かせください。

◎企画政策部長（市川専一郎君） 南長野運動公園総合球技場改修のための寄附の募集につきましては、みんなのスタジアムをみんなでつくろうのスローガンの下、ふるさと納税制度を活用して、平成二十四年十月から広く一般に寄附を募集しており、松井議員が御指摘のように特典も付してございます。昨年

度、市では、チームエンブレムをデザイン化した缶バッジを、子供でも気軽に寄附できるよう募金用に製作いたしました。

そして、昨年五月から七月にかけて、南長野運動公園総合球技場で行われましたＡＣ長野パルセイロのトップチームとレディースチームのホームゲームにおいて募金活動を行い、金額にかかわらず、缶バッジを配布しております。この缶バッジ募金は、十二日間実施し、延べ二千四十五人から総額五十七万一千二百三十一円が集まった上に、パルセイロの選手やボランティアが中心となって募金の呼び掛けを行ったことにより、選手とサポーターが触れ合う場にもなり、子供だけでなく大人の皆様にも大変喜んでいただきました。

低い金額でも寄附が集まりやすいオレンジの羽募金や寄附金限定ステッカーなどは大変有り難い御提案ではございますが、当面は好評を頂いております缶バッジによる募金をＡＣ長野パルセイロの協力を得ながら継続し、応援機運の盛り上がりを図ってまいりたいと考えております。

なお、オレンジの羽募金などによりまして、民主導による応援機運が更に盛り上がればすばらしいと考えております。

◆二十四番（松井英雄君） 缶バッジがあるということで、大変ありがとうございます。様々なオレンジの羽やステッカー、いろんなものがあるということでスタジアムに行けば、寄附をしてこれをもたらえるというような様々なグッズがあれば楽しく行けますし、また随時八千人なんていうこともあればいいなというふうに思っておりますので、よろしくをお願いします。

最後に、加藤市長におかれましては、平成二十七年のエポックイヤーに向けて、この平成二十六年度は是非とも上昇気流に乗るということをおっしゃっておりました。上昇気流というと、渡り鳥がVの字戦隊で多くいる中で、この先頭の鳥が上昇気流がここだということを見極めて全てを、みんなを引っ張っていくということでございます。加藤市長におかれましては、この上昇気流を見極めていただいて、先頭に立って引っ張っていただくように御要望申し上げまして、私の質問を終わります。

ありがとうございました。